

令和6年度第2回香川県立図書館協議会 議事録

日 時：令和7年3月13日（木） 13:30～15:00

場 所：香川県立図書館 研修室

出席者：梅澤委員、川根委員、河野委員、清國委員、平田委員、前田委員、山本委員

欠席者：池田委員、黒川委員、宮脇委員

傍聴者：なし

1. 開会

2. 館長挨拶

3. 議題

（1）令和7年度予算（案）及び事業計画（案）について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

（2）令和6年度運営状況について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

（3）図書館評価について

- ・事務局から説明
- ・質疑
- ・承認

（4）その他

- ・「こども図書館船 ほんのもり号」について

※ それぞれの議題に関する質疑については次のとおり

議題(1) 令和7年度予算(案)及び事業計画(案)について

委員：カウンター業務の委託事業費が前年度よりも1,100万円ぐらい増えている。何か新たな業務をするのか。それとも、諸物価が高くなっているから増額するということか。

事務局：人件費のほか、本をコーティングするブッカーという材料代なども高騰している点を反映し増額している。

委員：少し個人的な思いがあり、ためらいながらもこの場で発言させてもらう。デジタル化が進み、本もデジタルで読むという時代になってきている。これから先、さらにデジタル化が進むのかというと、そうではないだろうと最近思い始めた。むしろ、紙の本の良さが見直されるのではないかと考えている。パラパラめくるという形、それはデジタルでは絶対に真似できないことだ。今は、みんなが本を買って持つという時代でもない。そういう意味では、図書館に本があるということが今後見直される可能性があると思う。

紙の本には、デザインがあって表紙がある。そういう形を持った紙の本をアピールする取組みが何かあっても良いのかなという気がする。例えば、夏目漱石が読んでいた本、というのはもう1冊しかない貴重なものである。デジタルの本には表紙もない。色もない。でも、紙の本は文字から何から、すごく工夫して作られている。その価値をもう一度見直すことが大切ではないか。このまま、すべてが失われていくという風には進まないだろう。そういう中で、図書館の意義は増していくと考えている。家にはたくさん本を置けないので買わない。だから、みんな本を借りに行く。少し突飛な考えかもしれないが、やはり手で触れることができる本がいいと思わせる、そういう取組みを図書館でしてほしいと思う。

委員：私も図書館と言えば、ある意味ノスタルジックなところがあり、落ち着くし、静かでいいと思う。デジタルへの対応も必要であるが、紙の本の良さというものも残してほしい。

委員：本が並んでいると、この本を探しているのに、隣にある別の本に目移りしたりする楽しさがある。

事務局：デジタルと紙は対立するものではなく、共有していけばいいと考えている。これは受け売りだが、日本ほど本の装丁に工夫を凝らしている国はないそうである。図書館の職員である司書たちは、そういう本を愛でる心を持って、サービスを提供している。紙の本の素晴らしさというのは、図書館が今後も伝えていかなければならないものだし、そのことを通じて利用者とともに歩むと言うか、それが図書館の使命ではないかと日頃から感じている。その一方で、デジタル化、DX化は県の大きな施策でもあり、そういう要素も取り入れながら、事業を進めていきたい。

委員：私も新聞はデジタルで読むようになった。情報を得るという目的はデジタルでも達成できるが、芸術的なものも含めて、本の価値は別途あるような気がする。だから、本を読む或いは新聞を読むことについて、私たちには選択肢が与えられていて、その選択肢をどう主体的に選んでいくのか、ということになっているのではないか。

委員：関連することだが、私が関わっている大分県の教育の長期計画の策定作業においても、子どもの本離れが大きな課題になっている。長期教育計画だから、数値目標を設定し、それを達成するために施策を実施するのだが、読書の目標だけ極端に数値が低い。月に1冊以上本を読む子どもの割合がとても低い中で、その数値を上げていこうという目標を立てている。しかし、適切な指導もなく、やみくもに上げようと思ってもうまくはいかない。強制的に借りさせて読ませれば、

数値は上がるだろうが、何か良い方法はないものかと考えていた。学校では、資料2ページに記載されている「子どもと本をつなぐ人材育成」すなわち読書ボランティアの方々が活動していると思うが、その活動が効果に繋がっていないのか、気に掛かるところである。もちろん県立図書館としての役割もあるだろうし、学校にも学校図書館があるわけで、そのあたりがうまく連携を図っていけばいいなと、その長期計画策定の際に思った。

委員：学校や市町によってもいろいろ事情が違うと思う。私は昨年4月に異動したが、前任校では地域のボランティアの図書館指導員による活動が、コロナをきっかけに4年間ぐらい休止していた。現在勤務している学校では、学期に1回、ボランティアの方が各クラスに1人来ている。できれば、もう少し活動回数を増やしてもらえたら、読書の啓発になるし、例えば昔話を読み聞かせた時には、学校図書館の司書と連携して、読書の時間に昔話をずらっと並べて見せるなど、そういうことに力を入れて取り組めば、かなり効果が出てくると思う。

子どもはすごく素直なので、特に低学年であれば、「本を読もうね」とか、「今日は先生が読むから、聞いてから帰ってね」とか、そういう取り組みをすると、かなり違うのではないかなと思う。あとは家庭への啓発だ。家庭で本を読んで聞かせるというのはすごく大切である。私は、自分の子どもには寝る前に本を1冊読んでいたが、そういうことの良さも学校から伝えることができるし、学校の役割というものはまだまだあると思う。やはり他の業務がたくさんあり過ぎて、やればいいなと思うことを学校ができていないところはある。

委員：教育課程と読み聞かせとか、家庭での読み聞かせとかが繋がっていけば、効果が増すということである。その辺のところが何か県立図書館で、直接的でなくても、何か間接的にでもアイデアが生まれてきて、それぞれの活動が繋がればいいなと思う。

委員：私は、市の教育委員会に所属しているが、派遣という形で一日中小学校で勤務し、子どもたちの様子を見ている。また、地域の読み聞かせ団体の方々に学校に来てもらうコーディネートを担う立場でもある。幸い市内に3校ある小・中学校には読み聞かせ団体の方が来ていて、その活動が20年くらい続いている。私自身の読み聞かせの経験で一番感じたのは、読み聞かせで学校に入ったとき、当初は月1回ぐらいの活動であったが、ざわざわとしていた子どもたちが、1年、2年と読み聞かせを続けているうちに、本を広げた瞬間、子どもたちがこっちを見てくれるようになった。本当に20年ほどの読み聞かせ活動の経験から、集中力というか、15分程度であれば、じっとして話を聞くことが、少しずつではあるができるようになる。それが活動を続けている側としても嬉しい。

委員：本の魅力が子どもたちにはきちんと伝わり、その結果、集中して聞こうという姿勢が習慣化されるということだと思う。これは子どもが育つ環境においても、とても重要である。そこを大事にしていかなければと、子どもたちのために活動されている方がいるのは間違いないと思う。

委員：私もボランティアで読み聞かせ活動をしていて、以前、小学生のときに母からプレゼントされた本をよく読んでいた。私はその本がすごく好きで、自分の子どもにも同じ本を買い、その本を読み聞かせに持って行って、子どもたちに、「この本は私がみんなと同じ年ぐらいの時にね。」という話をしていた。ある時、「その本はどこで読めますか。」という質問をする子がいて、私は公民館に勤めているので「公民館にもありますか。」と尋ねるので、「いや、公民館にはないけど、図書館に行ったらあると思うから、読んでみてね。」と答えたことがある。

先日、図書館で紙芝居を3冊借り、家でちょっとみておいて、読み聞かせに持って行った。子

どもたちに「どのお話が聞きたい。」と尋ねて、時間があれば2話ぐらい読む。先日、4年生に芥川龍之介の『蜘蛛の糸』を読んだが、芥川龍之介を「知らない」と言われた。けれども、一緒に聞いていた先生の方が、「やっぱりこういう文学はいつ聞いてもいいですね。」とおっしゃった。子どもたちはキョトンとしていたので、「ほかにもたくさん良いお話があるから、ぜひ読んでね。」と言っておいた。

委員：高松市には中央図書館に加え、地域館が4か所、さらに瓦町サテライトもあるが、当市でも貸出冊数はどんどん減っている状況であった。私は昨年4月に館長に就任し、まず、ひと月150冊を上限に団体に本を貸し出す団体貸出制度について、こども食堂とか、保育所、幼稚園などに改めて案内した。その結果、貸出冊数が減少する中で、団体貸出は数%上昇しており、取組みの成果があったと思っている。その成果に基づき、次は、図書館であまり本を読まないサラリーマン世代を対象として、協会けんぽとか、商工労政関係に声を掛けて、職員の福利厚生の一環として、職場の休憩室や食堂などに本を置いて、昼休みなどに読んでみませんかという働きかけをしている。また、香川図書館では、隣接する小学校に、館長が自ら出向き、ある学年の子たちにポップを書いてもらって、図書館で紹介するという取組みをしたところ、他の学年からも書いてみたいという声が上がったそうだ。

このように、図書館は他の施設と同様、人が来るのを待つのではなくて、外に働きかけていかなければ、維持できない状況にある。

議題(2)令和6年度運営状況について

委員：先ほど、次年度の事業計画のところでも紹介があったが、英語で読み聞かせをするボランティアの方々が新しく加わり、今年度の「こども読書まつり」では「外国語であそぼ」という、英語と韓国語の読み聞かせをしたということだった。県立図書館としてのねらいをどこに置いて、この事業を実施したのか。外国語を取り入れることの先に何を見通しながら事業をしたのか。団体と繋がるとかいうようなこともあったのかもしれない。そのあたりの背景も含めて説明してほしい。

事務局：「こども読書まつり」は毎年開催していて、その目的は、普段図書館に来ない方にも来てもらいたいということで、マンネリ化しないように担当者は工夫して、いろんなイベントを考えている。「外国語であそぼ」は今年度初めて実施した。外国語というと、英語が主になるが、韓国語や中国語など、アジア圏の言語にも親しんでもらおうと考えた。児童資料コーナーにもアジアの国々の絵本が増えているので、利用してもらいたいという思いもあり、外国語の本を読むというよりは遊びを通じて、外国語に触れてもらう機会になればということで始めた。

委員：外国語と言うと、どうしても英語偏重になりがちである。小学校でも英語が必須とされ、特に、小中一貫校や義務教育学校などは、小学1年生から9年間通して英語教育を行うというところもあり、そちらに視点がいくが、アジアの言語に触れるというのも、直に学校教育には繋がらないが、これからの子どもたちの育ちにとって必要だと思うので。こういう取組みもいいことだと思いながら聞いた。

委員：この「こども読書まつり」には結構たくさんの人が来て賑わっているが、催しによっては非常に少ないものもある。12月に実施した、中学生を対象にした「図書館であそぼ！」は5人だが、これは募集の仕方などが違うのか。

事務局：中学生の「図書館であそぼ！」は、年度当初には計画していなかったが、担当者が、ぜひやってみたいということで実施した。当館では、小学生向けには見学・探検など、高校生向けにも司書体験があるが、中学生対象の行事がないところで、どうにかしたいという担当者の思いもあり、初めて実施することにした。カードゲームなど楽しい感じの行事にしたかった。あまり大勢になると仕切れないので、こじんまりと友達感覚でやろうということで、10名程度を予定した。初めてなので応募が少なかったが、このくらいの人数が、異なる学校の生徒同士が話をしたり、仲良くなるにはちょうど良かった。ある程度人数が集まるようになれば回数を増やしたり、チーム分けをしたりすることも、今後検討していきたいと思っている。

委員：別に人数が多ければいいというものでもないと思うので、それぞれの取組みの内容に合わせて実施すればよいと思う。

委員：これは個人的な関心だが、香川県図書館職員研修会の講演で「図書館におけるリスクマネジメント」というのは、どういう内容だったのか。

事務局：不特定多数の方が来館する公共図書館で想定される、様々なリスクをどのようにコントロールしていくか、マネジメントしていくか、という研修内容だった。

委員：カスハラとかの話もあったのか。

事務局：理不尽なクレームや過度な要求への対応などに関する内容もあった。

議題(3)図書館評価について

委員：窓口対応について、先日、初めて貸出カードの発行を受けたが、受付の方の対応が非常によかった。来館して本当にスムーズにカードを発行してもらえたし、その時、私の探していた本は所蔵していなかったが、それに関連する本を「こんなのがありますよ。」とか、「こんなのはどうですか。」と言って紹介してくれた。非常に親切で、好感を持ったので、この機会に話しておきたい。

私も、はじめはオンラインで申し込もうとしたが、よく分からなくて、窓口で手続きをしてもらった。来年度の数値目標として「新規登録者数に占めるオンライン新規登録者数の割合」を「4%以上」としているが、4%を達成することはなかなか厳しいかもしれないが、目標としては適切だと思う。

委員：私も、インターネットで蔵書の検索ができるのは便利だと思っている。探している本が県立図書館にあるのかどうかすぐにわかる。しかし利用者登録は、来館すれば丁寧に対応してもらえるのだから、そっちの方がいいのではないかと思う。オンラインでは少し不安が残る。

委員：インターネットで手続きをしても、本を借りるには結局足を運ばないといけないので、来館して登録手続きをしたほうが早い。

委員：そういう意味では、インターネットを利用すればよいことと、実際に来館して対応すればよいことを分ける必要がある。なんでもかんでもインターネットではないと思う。

委員：それは世代の違いもあるかもしれない。インターネットと対面のどちらのハードルが低いかということで、若い人たちはインターネットを選択するかも知れない。

事務局：確かに、結局は借りに来ないといけないので、登録手続きはその時でよい、ということになるのかもしれないが、ある程度インターネットなどに長けている方は、先に登録しておいて、スマホを提示して本を借りることに便利さを感じるところもあるのかなということで、利用者サービス向上の取組みの一つと考えている。

委員：もうスマホで本を借りることができるのか。

事務局：スマホの画面にバーコードを表示することによって、貸出しを受けることができる。

オンライン登録した方には、貸出カードは発行していない。

事務局：毎月平均100人以上の方がスマホを使って本を借りている。

委員：県立図書館の方針として、その方向に持っていきたいのか。

事務局：本を借りてもらえるのなら、スマホでもカードでも、便利なほうを使ってもらえればよいと思う。そのために両方を用意している。

委員：事業評価の本質的なところだが、この図書館評価はAを目指して、すべての評価がAになることが良くて、BやCになると努力が足りないという見方になるのか。それとも、BやCがあっても、そこに改善の余地を見出して、それをマイナスに受け止めるものではないということなのか。それによって随分変わってくると思っていて、前者だと、目標設定をA評価の達成が見込まれる数値に収めてしまうことも起こりうる。

それから、職員の方が頑張って目標をかなり上回った時は、Aを超えるS評価とかがあってもいいと思うのだが。

事務局：この評価は、今の活動状況のあくまでも目安ととらえている。むやみにオールAを目指すという考えはなく、それが図書館の活動目的とも思っていない。評価である以上、AなりBなり、ときにはCという項目も出てくる。それをいかに改善に繋げていくかというように、活動の参考にしている。いたずらにAを目指しているわけではないから、S評価というボーナスポイントみたいな制度も馴染まないのかなと考える。

委員：令和6年度の評価の中で「新規登録者数に占めるオンライン新規登録者数の割合」が唯一C評価と見込まれているが、よくよく考えると、これが達成される必要もないという気がする。別に、いくつ以上でないとかだめだというものでもない。だから、7年度は実態に即した目標数値を設定していると理解した。これは、図書館としてはオンラインによる登録者数を増やす努力をしたいという趣旨だと思う。そうすると、この図書館評価とは、当年度の取組みの姿勢を示すという意味合いのものであろう。

委員：評価には客観性が求められ、数値にしないと客観性が担保されない。けれども、数値にすると、目標に届いていないことも明確になり過ぎて、そこが何かマイナスに受けとめられてしまうこともある。

委員：評価という呼び方が果たして適切なのだろうか。もっと良い言い表し方があればよいと思う。

事務局：評価という言葉には、なにか通信簿的なニュアンスがある。